

## 「鹿児島県昆虫・貝・植物・岩石展」の過去・現状と課題

福田晴夫<sup>1</sup>・中峯敦子<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 〒 890-0024 鹿児島市明和 4-5-32

<sup>2</sup> 〒 899-5115 霧島市隼人町東郷 1395-1 霧島市立日当山小学校

### ■ はじめに

これはおそらく全国的に見てもユニークな展示会ではなからうか。内容は小中学生、高校生たちが作った標本コンクールである。最初に「昆虫・貝展」として戦前に始まり、大戦中と戦後 10 年の中断はあったものの、昭和 30 年に復活、その後あの“虫を殺して標本にすることは悪いことだ”という風潮の時代も乗り越えて、貝、植物、岩石が順次加わり、本年度は記念すべき 60 回（通算 66 回）になるはずである。ところが、自然の多様性が重視され、自然との共生が強く言われる時代に、なんとその継続が危ぶまれる事態になっているという。

筆者（福田）は大学生時代にこの復活に関わり、その後もいくらかのお手伝いをしたが、近年は眺めて応援している状況にある。しかし 60 年余りも続くと、その変遷史を体験的に知る人はいなくなった。したがってこの事業の存亡が話題になる今、現役の当事者としての筆者（中峯）と共に、昆虫を中心に経過や私見を述べ、このユニークな事業がよりよい方向に進むことを期待したい。

### ■ 始まりの頃 — 戦前、戦中

鹿児島昆虫同好会初代会長の故竹村芳夫さんが、昆虫展について次のように記述している（竹村、1962）。

昭和 10 年鹿児島へ天皇行幸の際、竹製の昆虫玩具一箱をお買い上げになったことがきっかけとなり、理科教育振興のために昭和 11 年から鹿児島朝日新聞社主催の「昆虫と貝類」展覧会が毎年開催されることになった。これは約 5 年（？）ほど続いたが、初回は時あたかも鹿商アマチュア倶楽部創立

の年であり、張り切って出品した倶楽部員が上位全部を独占するという圧倒的なレベルの差を見せつけた。その後も上位の殆どが商業のメンバーで、他校はとてども追いつけなかった。私は中学を卒業していたので、第 2 回に参考出品という形で、コガネムシ標本 4 箱を出して、感謝状を貰った。この展覧会も戦争と共にいつのまにか置き去られてしまった。

さらに越山正三先生（元鶴丸高校生物教諭）が、鹿商出身の坂上勝己氏の追悼文集「蝶来」に「昆虫展受賞」と題して記された一文がある（坂上、1980: 43-45: 抄録）。

昭和 11 年、山形屋において第一回の昆虫展が開かれ、その後 6 回も続いた。鹿児島高農の有名な昆虫学者岡島銀次先生勇退のあとに來られた新進気鋭の渋谷正健教授が、この昆虫展の審査に当たられた。鹿児島商業学校の生徒達が昆虫、貝類の作品で賞をほぼ独占していた。

ちなみに、鹿商は今の鹿児島商業高校の前身校である。ここで昆虫採集熱が盛り上がるきっかけになったのは、同校の生徒で、後に台北帝大付属農林専門部に入り、戦後九大からアメリカに渡り、昆虫形態学、進化発生生物学の世界的権威となられた松田隆一博士（1920-1986）らであったという。博士の業績については日本昆虫学会誌に鈴木（2012）の総説がある。この鹿商アマチュア倶楽部からは戦後に鹿児島昆虫同好会の会長、会員として活躍した方々を多数輩出している。しかし、彼らの貴重な標本は昭和 20 年の鹿児島市の空襲で焼失した。

### ■ 戦後の復活

昭和 30 年（1955 年）10 月 18-19 日、鹿児島大学農学部で日本昆虫学会第 15 回大会が開かれ

たのを契機として昆虫展が復活した。その運動の主力となったのは鹿商出身の青年実業家、坂上勝己氏(1924-1987年; 銘菓文旦堂の三男、映画館「新世界」の経営主)であった。福田は当時農学部害虫学専攻の4年生で、昆虫同好会の事務局の仕事をしていたので、あの頃はとても珍しかった坂上さんの自家用車に同乗して、新聞社やお役所を回り、なんと知事室にまで出かけていって、今も続く県知事賞の了解を取り付けたのだった。

かくて「鹿児島県第1回昆虫展覧会」(図1-3)は鹿児島昆虫同好会主催で、1955年10月の昆虫学会と時期を合わせて山形屋デパートで開催された。応募は350点(箱)で、一週間の開催期間中、連日満員の盛況であった(坂元, 1956)。参考出品として展示した福田の標本の中から、日本未記録種タツパンルリシジミが、九大の白水隆先生によって発見されたのもこの時である。

#### ■ その後の経過、発展

以後、これは毎年開催され、福田も同定会や審査会に何回か関わった。たしか小中学校の部、高校の部のほか、一時は一般の部もあったと記憶する。昆虫の部の審査委員長は昆虫同好会会長の竹村芳夫氏や坂元久米雄氏が務められた。ここに年代順に60回分の日時、展示会場、出品点数、入選者、特筆すべき標本の記録などをまとめたところであるが、残念ながら記録も記憶も乏しい。過去の関係者から話を聞き、南日本新聞の記事を参考にして、年表が完成することを期待したい。主催者、後援者としては鹿児島県小中高等学校理科教育研究協議会、県立博物館、教育委員会などが入れ替わりながら主役となり、南日本新聞社と山形屋も深く関わり、各同好会もサポートしてきた。会場は山形屋デパートが定番で、入選作品は県立博物館で一時預かって展示したこともある。

昆虫標本の出品点数(個人、団体の数)は、平成9年(第43回)63点、10年84点、11年93点などの記録が残る。県知事賞受賞者(1人)の所属校は、平成10年から順に記すと、奄美大島住用小、市来農芸高校、垂水市牛根中、奄美大島手花部小、鹿屋市花岡中、垂水市牛根中、鹿児島



図1. 第1回昆虫展の様子。会場は山形屋。



図2. 第1回昆虫展の様子。会場は山形屋。



図3. 第1回昆虫展の様子。会場は山形屋。

市吉野中と全県にわたり、好ましいばらつきがみられる。

#### ■ この展示会の大きな成果

この標本展の成果は、昆虫についての貴重な情報が得られることと、多くの県民が自然に目を向けるきっかけとなり、自然愛好者、研究者を育てたことにある。

出品された貴重、希少な虫たち — アイノミド

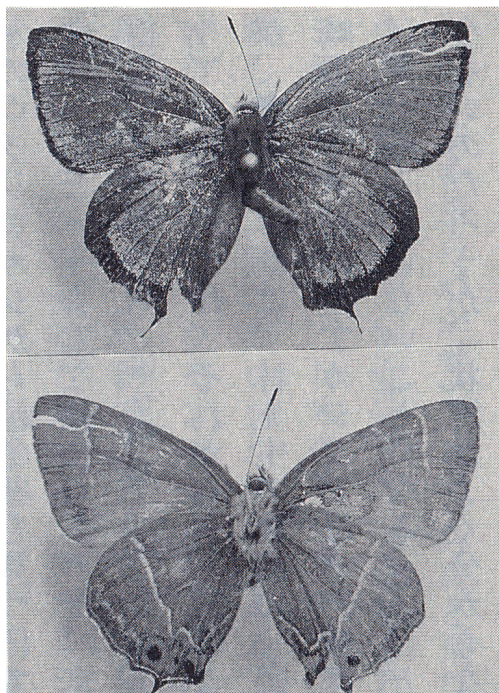


図4. 昭和33年の展示会に出品されたアイノミドリシジミ。

リシジミ（シジミチョウ科）の「1958年8月、エビノ、湯田のり子」なるラベルのついた1♂の標本が1958年の昆虫展に出た（福田，1959）。これは本人にも確認し、栗野牧場からえびのに至る途中で採集されたことが明らかである。しかし、その後は入念な探索にも拘わらず発見できないことから、本県のレッドリスト（2003年）では「情報不足」にランクした。そして今は絶滅危惧IA類に上げることが検討中である。

1957年第2回の展示標本の中には、志布志中学の学生だった成見和総君のハッチョウトンボ（戦後県下初記録）、ミズイロオナガシジミ、ミヤマカラスアゲハ、ミカドアゲハなどの貴重な記録が含まれていた（福田，1957）。

希少種だけでなく、これらの標本からは、本県を特徴づける南方からの飛来種（迷蝶、迷トンボなど）のその年の概況も知ることができるし、近年では南方からの侵入害虫のヤシオオオサゾウムシ、キオビエダシャク、キョウチクトウスズメ、

クロマダラソテツシジミ、クロボシセセリなどの発生状況のデータともなる。このような標本展からの“新発見”は大きな楽しみで、その記録の多くは同好会誌 *Satsuma* に収録されているが、近年は会期が短くてデータが拾い難く、残念な思いをしている。

出品・入賞した人々のその後 — 学校に宿題として提出した人、県の展示会に出せた人、そして受賞した人、とにもかくにも昆虫を採集し標本にするという体験をした人たちが、その後どうなったか。もちろん大部分は不明であるが、今もあの頃を懐かしむ人たちが少なくない。彼らの中には昆虫学者への道を歩んだ人たち（敬称略）、鹿大農学部教授の櫛下町鉦敏、鹿児島女子短大校長の幾留秀一、農業害虫の分野で活躍した田中章、現役の松比良邦彦、昆虫学でなくても理系に進んだ人たち、東大大学院獣医学准教授の大野耕一、鹿大農学部生物環境学科助教の平瑞樹、教育界に入って活躍した人たち、肥後昌幸（垂水市教育長）、成見和総（鹿大付属小・純心女子大など）、加治屋啓子（高校家庭科教諭）、さらに医師、会社経営者など実に多彩で、あちこちから「私を忘れていませんか」という声が聞こえそうである。彼らのほとんどは今も昆虫同好会の一員として残っている。

注目すべきは、小学生時代に昆虫採集を体験した少年少女たちが、現在パパ・ママになって、子どもたちと一緒に採集を再開し、近くの人たちを巻き込んで小さなグループを作って楽しんでいることだ。彼らも昆虫同好会に入り、きちんと原稿を書き貴重な記録を残している。

## ■ 現在の状況

現在の様子は、<http://www5.synapse.ne.jp/kenrika>にて公開されている。まず、夏休み前に「第〇回鹿児島県昆虫・貝・植物・岩石展開催要項」（4頁）が、各教育事務所長、各教育長、小・中・高校長宛に配布される。その概要は以下の通り。

**開催要項****1. 趣旨**

四季折々の豊かな自然に親しみながら、子どもたちが観察、採集した昆虫、貝、植物、岩石の標本を展示して、児童・生徒および一般県民に、郷土鹿児島県の「豊かな自然」についての理解と興味関心を深めさせるとともに、自然愛護思想の高揚を図る。

**2. 主催**

鹿児島県小中高等学校理科教育研究協議会。

**3. 後援**

鹿児島県教育委員会、南日本新聞社、山形屋、鹿児島県市町村教育委員会連絡協議会、鹿児島昆虫同好会、鹿児島貝類同好会、鹿児島植物同好会、鹿児島県地学会。

**4. 期間**

平成〇年9月7日(金)→9月9日(日)(最終日は午後4時まで)。

**5. 会場**

山形屋文化ホール(2号館6階)。

**6. 出品対象**

小・中・高の児童・生徒の作品とする。

**7. 出品(要約)**

個人と団体の部がある。標本は県内産で、初出品のものに限る。保護者の協力も認めるが程度問題。出品点数、標本箱などがていねいに説明してある。

**8. 審査の観点及び審査日(要約)**

標本の仕上がり具合、ラベルの正確さ、種名の正確さ、配列の工夫、出品した標本のリストなど。9月6日に審査し、結果は南日本新聞に掲載される。

**9. 表彰**

知事賞、県教育委員会賞、鹿児島市長賞、鹿児島市議会議長賞、南日本新聞社賞、山形屋賞(以上が特別賞)、さらに特選、入選、参加賞。表彰式 9月9日(日)午後2時、山形屋。

**10. 搬入、引き渡し**

個人単位で行う。搬入は山下小学校へ9月1日(土)→2日(日)。

**11. 採集、標本の作製法**

学年レベルを考慮して、各分野ごとに略記してある。

**12. 作品の出品例**

搬入するときの注意書きがある。

**13. 名前を調べる会(名づけ会)**

山形屋で8月18-19日にある。

**14. 付記**

お知らせ、第〇回「理科に関する研究記録」も他に募集している。

**15. 連絡先**

鹿児島市立〇〇小学校〇〇先生(電話、ファクス番号)。

前段階としての学習会など—事前指導が大事だということで、採集会→標本づくりの会→同定会が各地で開催されるようになり、近年では鹿児島市、垂水市、鹿屋市、薩摩川内市、指宿市、霧島市などでこれら一連の会が続いている。かつては、市町村によっては予選的な展示会をもったこともあったらしいが、近年は作品搬入が夏休み直後となり、これはみられなくなった。

応募状況—平成19年(2007年)以降の応募状況(表1)をみると、総数が減少傾向にあり、部門別では昆虫は減少、貝は昨年が減少、植物も漸減傾向、岩石が2009年から増加している。

この原因は、採集や標本作成が易しいとかいう単純なものから、「生きものを殺す」ことへ抵抗感とか、身近な自然の多様性の乏しさ、それらへの関心の低さなど、現在の人の生き様に関わる

表1. 近年の出品作品の応募状況(数字は個人および団体の数)。

年	回	昆虫	貝	植物	岩石	合計
2007	第53回	81	68	355	52	556
2008	第54回	75	77	327	38	517
2009	第55回	88	72	284	115	559
2010	第56回	68	79	225	134	506
2011	第57回	54	78	230	137	499
2012	第58回	48	74	198	144	464
2013	第59回	45	59	209	128	441

ものまでいろいろありそうだ。もちろん学校の姿勢も大きな要因であろう。出品者は多くが小学生であり、中学校では、夏休みの課題として標本づくりを課している鹿大教育学部附属中が多数を占めている。高校生の出品は、毎年1-2点あるかないかである。

■ 標本コンクールとしての課題

主催者と後援者 — 運営のほとんどを県小・中学校理協が負っている。とくに小学校理協が企画し、講師招聘、会場担当者との交渉、参加者対応（出品問い合わせ、クレーム対応等）を、全くのボランティアで行っている。近年は高校生の出品がほとんどみられないこともあって、運営に関わる高校教員は少ない。

児童、生徒の関心 — 主役となる少年少女そして青年たちの自然との関わりは、以前に比べて、場としての生物多様性の低下、時間的には野外での遊びの減少で、激減している。

教師たちの採集体験不足と標本の価値認識 — 小中高校の理科教員も標本や自然に対する関心が低い訳ではないが、フィールド体験とくに採集体験は欠如、不足しており、採集の楽しみや苦勞、標本の価値等の認識にはばらつきが大きい。

名付け会講師 — 各分野とも高齢化し、今後部門によっては不在が危ぶまれる。理科教員に同定のできる人、そのように努力しようという人が希少になっている。

出品者の減少傾向 — 表1に示したように、近年は応募者、参加者が減少傾向にあり、地域、学校の偏りが目立つ。

審査員の苦勞 — 音楽会や書き初め大会のように応募者の力を直接評価できず、どうしても教師、保護者らの指導、協力が付いてくるから、評価して等級（各賞）を決め難い。特別賞にランク付けができてしまって、最高位の知事賞を狙う競争意識もみられる。そのため保護者や教師の手が入り過ぎて、“子供らしい作品”の評価に苦慮し、すっきりしないものが残りやすい。

展示の日数と会場 — 現在展示日数は3日で、会場は山形屋2号館6階山形屋文化ホールである。



図5. 昨年(2013年)の展示会の記事 2013年9月11日, 南日本新聞.

あまりにも短く、観覧者は僅かになってしまう。標本とその記録 — ほとんどは希少種ではなくとも、身近な自然の貴重な証拠・記録であるが、展示会後にその標本は活用されず、記録も残されないものが多い。

■ 今後への提言

これを存続し発展させる方策をみんなで検討したい。さしずめ次のようなことはどうだろうか。主催者 — 県理協と県立博物館の共催のような形を作れないのか。県博でも一時期は入賞作品を展示し、移動博物館でも活用していた。現在も標本づくり講習会、名づけ会もやっているから、審査や展示場にも関わってよい。両者がよく連携

をとり、場合によっては昆虫、貝、植物同好会、地学会とも話しあって進めてほしい。

後援者 — 県や市、新聞社、山形屋の後援はありがたいので、緊密な連携をとりながら進める。とくに県や市町村の「生物多様性関係の施策」との関わりを強化したい。他にスポンサーや民間団体などの協力者を探す努力も期待される。

方法・内容 — 事務をもっと簡略化できないか。要項の注意事項、参考事項も丁寧過ぎる記述はないか。基本的には、多くの県民に標本づくりに挑戦してもらい、その作品を募集して展示、表彰するだけのことなだけで、それに最低限必要なことは何だろう。

採集品 — 昆虫に関して、今制限している「その年に県内で採集したもの」という部門の他に、「居住する市町村内で採集したもの、年数制限なし」なる新部門を設けたらどうか。これにより、身近な自然に目を向け、その多様性あるいは貧困さに気付く人が増えるだろう。お金と時間をかけて遠征しなくてもよいし、目立つ種の採集に偏ることもない。何年かかけてじっくり身近な生物の標本を蓄積できる。

表彰 — 現在は特別賞（知事賞、県教育委員会賞、鹿児島市長賞、鹿児島市議会議長賞、南日本新聞社賞、山形屋賞）、特選、入選、参加賞があり、前述のような選考の悩みがある。保護者らとの“共同作品”は必ずしも悪いことではないので、程度問題として常識的に判断してもらうしか手はないが、上記の「身近なもの部門」を入れること、さらに年齢による区分を加えて、小学校低学年、高学年、中学校、高校の部の4部門に分けて選考する。上記の賞をそれぞれに配分し、知事賞だけを独立させて全部門から選ばれた1作品とする、などのいろんな案を検討したい。新聞社や山形屋のほか、民間のスポンサーを募って新しい賞を設ける方法もあろう。

標本づくり — 現行のいわば正統派、科学的にしっかりした標本づくりも体験して欲しいが、この型を破って、羽が汚損した虫、欠けて色あせた貝、花のない幼植物などの標本もおおいに評価したい。どれもが生きものの生き様をよく示してい

るからである。同じ種をたくさん並べて変異に気付くのもよいことだ。出品者の感動と発見力も評価の対象にしたい。標本箱は展示のしやすさから一定の規格は必要だろうが、全体がそのサイズの倍数で収まれば、自作の大きな箱も歓迎してよい。永久保存用の箱はその次の段階だろう。

種名調べ（同定） — 身近な虫、草、貝のどれをとってみても、種名調べは困難を極める。このことを体験して欲しい。これは名付け会の講師でも似たようなものである（体験からの所感）。だからと言って図鑑を開く作業を省略してはいけない。悪戦苦闘して同定作業をやらせることに意義がある。その結果「〇〇の一種」というラベルがついてもよい。一方、こんなものにまでちゃんと種名がついているのか！という驚きの効果も大きいから、同定会は必要だ。

同定できる人の育成 — これはどの分野でも緊急な対策が必要で、大学や県立博物館などでいくらかの方策が実行に移されている。幸い今は多くの図鑑、手引書が出ているから、普通種のほとんどはそれほど苦勞しなくても同定できるはずだが、いざ手をつけるとすぐにお手上げになる。単に種名を知っているだけの“物知り”の育成は、“芳しくないコレクター”の育成になりやすい。昆虫同好会では“郷土の虫の記録を残す”ことをモットーに、“原稿の書ける人”の育成に努めている。同定できる人が減少した原因はいろいろあるだろうが、責任をたらい回しにせず、筆者らは高校生物部の再建に期待をかけたい。

出品者・参加者の増加対策 — 昨今、自然への関心が減ったとは言っても、小学生時代の前半には、ほとんどの子供が身近な生きものに強い関心を示す。この時の大人たち、とくに母親や教師の自然観と子どもたちへ接し方が問題である。これはPTAも加えて十分に検討したい。（鹿大付属小学校のモデルがある）。県や市町村の生物多様性戦略もこれを支援するものである。

教師たちの体験と意識 — 上からの研修会、手引書作成もさることながら、児童生徒をフィールドに出し、さまざまな質問を浴びせて、教師の自覚を促すことも大事だと思う。これは校内研修の

問題でもあり、校内の観察池、畑、飼育舎、植木、雑草といった場の活用の問題でもある。花壇コンクール以上に大事なことでなかろうか。

分野の自由化と拡大 — 上記以外の素材で、ダンゴムシ、クモ、ムカデ、エビ、カニ、小魚などは液浸標本やはく製標本が主体となり、子どもたちが取り組み難い。しかし、道は空けておいて良いだろう。予想もつかなかった秀作が出てくるかもしれない。

出品標本 — 苦心の作品も多くは何年か後にはゴミ処理場行きになるのだろうか。これは多くの芸術作品も同じことで、人が造ったものの末路であるが、それはそれでよい。その作成過程と当分の間の保存期間に、標本は十分に価値を発揮しているであろうから。惜しむらくは希少種標本、貴重な記録となる標本の運命である。博物館か、郷土資料館か、学校の資料室かで、活用できる道があるはずだ。その道筋も検討しよう。

記録帳の活用 — 標本と一緒に種名と採集データの一覧表が添付されている。同定などに多少の問題はあるものの、希少種、迷蝶の記録のほか、その居住地の虫たちの存在記録が埋もれるのは惜しい。全県はもちろん、各学校、市町村の生物目録作成の基本的データとして活用できるよう保存を図りたい。優秀な作品は印刷物にして残しておくべきで。そのような印刷費の支出、捻出方法も考えておかなければならない。

会期・会場 — 会期を延長し、県民の多くが観覧できる会場を捜すことが必要だろう。山形屋を含めて、県立博物館、県民交流センター4階、その他の会場を広く検討して欲しい。標本が傷まないような移動方法がとれたら、移送費負担で県内各地で開催希望者を募る方法もある（運送業者と

の連携必要）。このような希望者を増やす努力も大事なことだと思う。

昆虫採集の利点・特殊性 — “蛾田引水”ながら（蛾類愛好者の使う文句）、ひと言。それは命の教育に重要な“殺す”という行為を容易に体験できることである。これは“かわいそう教育”と表裏一体をなすもので、本誌の読者には説明不要かと思う。

最後に、貝、植物、岩石など他の分野の方々の意見も聞いたら有り難いし、県立博物館や県関係当局の積極的な協力も期待したい。

## ■ 謝辞

本稿を草するにあたり、かつての出品・受賞者およびその関係者（敬称略）の成見和総、肥後昌幸、大坪博文、田中 洋、田中 章、平 瑞樹、そして講習会で指導経験豊富な福田輝彦、現在の審査委員長の川床正治の諸氏、さらに県小学校理科教育研究協議会から多くの有益な示唆をいただいた。ここに改めて深甚の謝意を表したい。

## ■ 引用文献

- 福田晴夫, 1957. 第2回鹿児島県昆虫展に出品された蝶類の記録. *Satsuma* 6 (1): 13-14.
- 福田晴夫, 1959. 霧島山産蝶類目録. *Satsuma* 8 (1): 23-42.
- 坂元久米雄, 1956. 第一回昆虫展に思う. *Satsuma* 5 (1): 28.
- 坂上凱子, 1980. 蝶来 — 坂上勝己追悼集 —. 個人出版物, 136 pp.
- 鈴木邦雄, 2012. 進化発生生物学の隆盛と松田隆一博士 (1920-1986) の“汎環境主義”. *昆虫ニューシリーズ*, 15 (3): 133-150.
- 竹村芳夫, 1962. 「一昔前の虫屋さんたちのこと」. *Satsuma* 10 (4): 119-125.

*Nature of Kagoshima* 40: 273-279